

山崎國紀著『鷗外の三男坊 森 類の生涯』『鷗外 成熟の時代』

瀧 本 和 成

『鷗外の三男坊 森 類の生涯』

著者である山崎國紀氏は、その「あとがき」の中で、

私が森類氏の評伝を書きたいと思い始めたのは類氏の生前
中からであった。

何が私を駆り立てたのであろうか。

ただ単に、文豪の子息として、その「生」に関心を持った
ということだけでなく、お会いしたとき、その挙措の背景に
ある七十年余を生きたその軌跡にただならぬものを実感
したからであった。

と述べている。森類逝去の直後、ご遺族から類関係の書簡、日記
等資料の提供を受けたことが、評伝を執筆する直接の契機となっ
たことは想像に難くない。が、著者の森類への関心は、単に貴重
な資料の提供を受けたということではなく、また鷗外研究者とし
ての義務感からでもなく、それは一人の人間として森類その人に
惹かれていったからにはかならない。

私はこんな類氏にいつしか親近感を抱くようになってい
た。私はできれば、あの類氏に漂う鬱積感の性格を検証し、
少年時代から、劣等者のごとく思われてきた不当性を探って
みたいと思うようになっていた。

著者は、「類氏に初めてお会いしたとき感じたのは、一種の鬱
積感であった」と記している。その真相を究明すべくこの稿はは
じめられている。著者は「類氏は特別に劣っていたわけではない。
余りにも期待過剰と偉すぎる父親の許で、実力が出せぬまま、ま
ず小学校から中学時代、いまだいう不登校の少年のように萎縮し
てしまった」ところに、類の「鬱積感」とそれに「耐える風貌」
を見て取っている。

一九二二（大正一一）年七月九日、満六〇歳で鷗外が亡くなっ
た時、妻志げ四二歳、類は一一歳であった。「父がボンチコと言
ってかわいがってくれ、僕がバツパコと言って親しんでいた時代
は、僕が十、父が五十九のころであった」（『鷗外の子供たち―あ
とに残されしものの記録』光文社 一九五六・一二）と後に類は
語っている。夫の死後母志げの関心が専ら子供に注がれても無理

はない。まして長男於菟は先妻の子であつたし、次男不律は生後半年で死んでおり、母志げにとつて三男類は唯一実の男の子であつた。それゆゑ母の期待も並大抵ではなかつた。が、それを裏切るような類の学業不振は、その落差の分だけより大きく幼少年期の類を苦しめることになつた。母の期待はいつしか利発な杏奴に向けられていく。その中で類は劣者のレッテルを貼られる。その頃の類の様子を茉莉は暮尾という少年に重ねて描いている。

母親のたけの愛情を裏返した、一種の怒りと憎しみとの間に、小さな暮尾は挟まれて、ゐた。多くの家族の中にあて、彼は独りで、あつた。表情のない顔で、何かを凝と見てゐる。暮尾は、家族の誰からも、多くの時間忘れ去られて、ゐた。

(クレオの顔)

著者は、母や姉たちから「類は、やはり森家の中では陰湿な、まさに隠花植物のような存在にみられていた」ことを指摘し、その頃の少年類の心情を推し量つてゐる。その後兄於菟は父の母校東大医学部へ進学、大学教授のエリートとなつていく。二人の姉茉莉と杏奴は、随筆家として世に知られることとなる。類もまた文豪森鷗外を父にもつ子供の一人として、父から受け継いだその才能を生かすべく、芸術方面に活路を求めていく。志した絵画や小説の分野での葛藤と苦難の日々、そのなかで依然として「独り類氏だけは無名」のままであつた。「幼少年期から一度も」表を闊歩できない類は、いまも、また屈辱を生きていくのである」と著者は言う。そして、皮肉にも「名のある雑誌に載つた類の最

初の文章」によつて、類は決定的に「兄姉から孤立していく」ととなる。一九五三（昭和二十八）年岩波書店刊行の「世界」二月号に載つた「森家の兄弟」、引き続き掲載された「鷗外の子供たち」（「群像」一九五六・一）がそれである。同年十二月に光文社から刊行された『鷗外の子供たち―あとに残されしものの記録』は、この原稿事件が、「姉弟が血で血を洗うような闘いとなり」、「岩波書店の実力者小林勇まで巻き込んだ大騒動となつた」経緯をも余すことなく描き出している。著者は、類と兄姉たちとの確執がどのように生まれ、類が森家の中でただひとり孤独で淋しい「生」を生きたかをその誕生から終焉まで丁寧に追ひながら検証している。と同時に周囲の人たちから優しく愛された類の性格や人柄を油絵の個展を開く際の斎藤茂吉の推薦文や千栄書房開店時の佐藤春夫の紹介状にみられる文などから明らかにしている。とくに春夫の「森類はわたくしの詩歌の友」という件は森類に寄せられた文の中で最も愛情の籠もつた言葉である。こうした初公開の書簡や日記などの資料が数多く本文中に紹介されており、それが著者の感情を極力抑えた簡潔な文章と相俟つて、森類の息遣いを生々しく伝えている。淡々とした文章だからこそ資料が生かされ、その内に潜む著者の森類への並々ならぬ思いや情熱が伝わってくる。まるで著者自らの生き方と重ねているかのようだ。

今後この森類の評伝を契機に森類文学の本格的研究が起ることを切望したい。森類の文学を通して鷗外をみる視点の獲得は、新たな森鷗外像の再構築に向かう一歩でもある。

『鷗外 成熟の時代』

著者は、すでに『森鷗外―(恨)に生きる』(講談社現代新書

一九七六・一二)、『森鷗外―基層的論究』(八木書店 一九八九・三)、『鷗外森林太郎』(人文書院 一九九二・一二)をはじめとして数々の鷗外論を執筆、発表されている。この論考は、とくに鷗外の「成熟の時代」、「明治四〇年代から、それ以後」の鷗外文学の分析を中心に論を展開したものである。この時期を「成熟の時代」としたのは、「小説のみのり豊かな生産と文学的再活躍のさま」に加えて、「社会的、人間的成長をも包みこんで捉えた結果だ」とその理由を「あとがき」にて明らかにしている。

第一部は、「その小説空間」と題して、初期三部作から明治四〇年代の現代小説、大正期に入つての歴史、史伝小説への鷗外文学全体の流れとその位置づけを行つてゐる。一人の文学者を分析する時、全文学活動の流れを常に視野に入れつつ、ある特定の時期に焦点を絞っていくことがいかに重要であるか、そのことを第一部は再認識させてくれる。

第二部では、明治四〇年代の小説を『青年』『蛇』『雁』『流行』『さへづり』を中心に取り上げ、この時期の文学に新たな意味を探ろうとしている。とくに鷗外の「生命主義」と作品との関係进行分析、指摘している点が注目される。初期三部作で提出された「真の生」「への希求」が、『青年』論では「若い生の葛藤に壮年をいか

に生きるか」を重ねて論じ、「蛇」論では「新しい女」の出現と家庭問題を作品のモチーフとして読み取り、近代女性の新しい生き方を当時の鷗外の女性観と結びつけて論じている。そして、『雁』論では「舞姫」で描出された「まことのわれ」の自覚の「裏返し」としてお玉が形象されていることを指摘し、そこから鷗外の内面と明治四〇年代の時代批判との関係を窺い知ろうとする姿勢を滲ませている。また、『流行』および「さへづり」論は、鷗外と「三越」との関係为背景に、雑誌「三越」や三越百貨店内部の新資料発掘と分析を踏まえて、社会の「流行」現象と人間の心理について論究したものである。鷗外の「流行」への意識が、作品「妄想」に通底する日常生活の「不確かさ・曖昧さ」と関連づけられることをはじめて指摘したのである。何れも明治四〇年代「成熟」の中味を作品と作者との関係を軸に新しい視点から切り込むことによって、その位相を捉え直そうとしている。

第三部は、歴史小説、なかでも『高瀬舟』『阿部一族』『安井夫人』を取り上げ、あらためて大正初期の鷗外歴史小説の再検討を試みている。『高瀬舟』論では、ここでも「真の生」をキーワードにしなが、ら、「己れの主体性」を抑圧してやまない官僚世界から飛翔したい作者鷗外の精神が結実したものとして位置づけている。また、『阿部一族』論では「非主体的な役人像への視線」を鷗外の「峻烈で鋭い人間凝視の眼」として見、それらは『高瀬舟』の庄兵衛、「寒山拾得」の閻丘胤らの批判に継承されていると結論づけている。「安井夫人」論では、その鋭利な批判の「ま、な、ざ、し」

に柔和さが漂い始めていることを分析、指摘している。そこに〈新しい女〉を見る鷗外の視点が導入されていることを見逃していない。

第四部は、「鷗外ともう一人の軍医」〈鷗外と京都〉からなり、「鷗外の、ある精神の断層を」捉えようとしている。ここでは、鷗外の書簡や日記等からの感慨を丁寧に追うことによって〈尾崎紅葉の葬列〉での突切り事件や〈京都〉という街を通して見える鷗外の内面性や心象風景が語られている。

第五部は、天理図書館蔵の『伊沢蘭軒』森鷗外自筆増訂稿本の検討とその考察である。自訂稿を対象にして、作者の改訂意図を探ることによって、史伝の「基本認識と方法」を明らかにしようとの試みが緻密な分析の中で展開している。

第六部は、「多くの部分が未公開であった鷗外の母峰子の日記を全面的に紹介、分析し」た結果を踏まえてその意義について論じたものである。これは、先に著者編『森鷗外・母の日記』（三一書房 一九八五・一一）の刊行にて、新たな鷗外像が母峰子の視点から解明される契機をなした『峰子日記』考』を初出としている。それは単に鷗外像再構築のためだけでなく、明治大正時代に生きた当時の女性の生の声、生活が記録されている貴重な資料であり、その分析は、『峰子日記』のもつ世界の作品論にもなっている。

本書は、このように「成熟の時代」を様々な視点から追究、分析することによって、とくに明治四〇年代以後の森鷗外の人と文

学を明らかにしようとした論考であり、新しい視点や資料を発掘し、意義つけたところに真骨頂がある。著者の変わらない鷗外と文学に寄せる強い情熱によって支えられた一書である。

『鷗外の三男坊 森 類の生涯』

（三一書房、一九九七年一月、三一三頁、三、二〇〇円）
『鷗外 成熟の時代』

（和泉書院、一九九七年一月、二九三頁、七、〇〇〇円）

注

（一）初出は「新潮」（一九五九・一一）に「禿鷹」という題名で発表されている。

（たきもと・かずなり 本学助教授）